

パネルディスカッション

テーマ:「つくばの地域力の活かし方」

要 旨

つくばは、もっともっと魅力的なまちに成長します。パイオニアとして様々なチャレンジができます。夢やビジョンを共有できると、潜在的なつくばの地域力が発揮されます。

2030年のつくばの姿を描いてみましょう。フォーラム会議参加者の皆さまの出番はどこでしょう。つくば環境モデル都市行動計画(案)は、様々なメニューと連携の方法を提示してくれています。実行には、ビジネスプラン、暮らし方のデザインが必要です。

パネリストの方々は、農業を軸とし、大きな夢、技術、ノウハウを持ち、仲間や地域を大切にされています。実現したい2030年の社会像、夢に向かって歩んでいる戦略を語っていただきます。人、技術、制度、情報、資金をつなげて実行する作戦も披露いただけたらと思います。

つくば3Eフォーラムでは、今後の展開方向として、グリーン・イノベーションを活用した持続可能な低投入・高付加価値の最先端農業「スマート・アグリカルチャー」をバイオマス、太陽エネルギー、都市構造・交通システム、エネルギーシステム評価のタスクフォースでの成果を組み込んで、連携プロジェクトとして生み出そうと検討しています。自然エネルギーの活用、脱石油、資源循環、施設園芸、土壌診断、品質保証、生産効率向上、6次産業化、マーケティングがキーワードです。このプロジェクトを進めるためのアドバイスをパネリストからいただきます。

フォーラム会議参加者の皆さまから、いかにしたら価値あるプロジェクトになるか、コラボの可能性などについてご意見、情報をいただきたいと思えます。パネルディスカッションは、生きものです。ダイナミックに展開します。

| | |
|--------|--|
| モデレーター | 柚山 義人 (独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構 上席研究員) |
| パネリスト | 遠藤 健二 (有限会社ストロベリーフィールズ 代表) 小久保貴史 (農業生産法人 株式会社筑波農場 代表取締役) 中野 明正 (独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構 プロジェクトリーダー) |

(柚山) つくばにある夢、叶えよう。出会いがあれば実現できる。人の想いと科学の力。パネルディスカッション「つくばの地域力の活かし方」を始めます。パネリストを紹介します。遠藤さん、小久保さん、中野さんです。よろしく申し上げます。2013年度、私が新たな境地、感じたものに「ドリームプランプレゼンテーション」があります。つくばの地域力をさらにアップするために、グリーン・イノベーションを活かすために必要な要素だと

感じ、今日は皆さんにその世界に触れていただこうと思います。「ドリームプランプレゼンテーション」とは何かを、まず遠藤さんに紹介いただきます。

世界農業ドリームプランプレゼンテーション

(遠藤) 皆さん、こんにちは。ドリームプランプレゼンテーション、通称ドリプラといいますが、聞いたことがある方は？ 少しいてうれしいです。今



までいろいろな方がご説明をしてくださっていたのですが、事業など何かをやろうというときに、事業プランをプレゼンするというのはよくあると思います。仕事などで「こんなことをやります」、「こんな数字で、こんな人とこんなことをやって、こういうふうになりますので、ぜひやってください」ということをよくやります。しかし、ドリブラというものは、事業計画をプレゼンするのではなく、夢をプレゼンする大会なのです。自分の夢をプレゼンする、そこが違っているのです。やりたいことがあってやるのですが、数字などではなく、その人が何を、なぜやりたいのか、なぜその人がやらなければいけないのか、それをやったときに世の中はどうか、誰がどんなふうに喜んで、どんなふうに変わっていくのかをプレゼンする手法なのです。それもわずか10分間という中で、自分が作り出していく夢、世界、なぜ自分がやらなければいけないのか、なぜそれを絶対にやろうと思っているのか、あきらめない理由を見ている方に伝えていきます。これは説明ではありません。その方の夢、未来、どんなことが起きるのかを共に体験していただく手法がドリブラというやり方です。それによって何が起るかというと、その人の夢に共感と感動を持っていただくということです。共感者と支援者を集めて、夢の実現に足りない部分を補い、共に夢を実現していく。誰かの夢をみんなが応援して実現していくというのが、ドリブラという仕組みです。昨年10月、私は農業に特化した「世界農業ドリームプランプレゼンテーション」という大会をやらせていただきました。東京ビッグサイトで開催したのですが、私が思ったのは、農業にはすごく技術もあるし、小久保さんなど取り組んでいらっしゃる方はみんな魂を持ってやっているのですが、それを伝える場がなかった。なぜ私たちがこんなに大変だと言われる農業をやっているのか、そういう思いをみんなに伝えることによって、いろいろな人がつながっていくのではないかという思いから開催しました。ド

リブラには相互支援というのが一番大事で、プレゼンター同士が支援する、参加者とかいろいろな人が支援し合い、みんなが互いにつながっていくことによって、次の良い世界を作っていこうという仕組みです。ドリブラでは、発表会が大事なのではなく、そこに至るまで、いろいろな人が本当に「なぜ自分がやらなければいけないのか」、「本当に自分がそれをやりたいのか」と、常に半年ぐらいかけて、もだえ苦しみながら、自分と向き合っていていく仕組みなのです。5カ月ぐらいでカリキュラムを組んで、ブラッシュアップしていきます。農業の場合、20人が今回プレゼンしてくださいました。最後にビッグサイトでファイナルを開催しました。有名な方では、安倍昭恵夫人が応援に来てくださいました。あり得ないようなことがいろいろと起きるのですが、単純に共感してくださったからです。いきなり「来てください」とオファーして、夢をさんざん語ったら「応援します」ということで、「来年もぜひ来てください」と言ったら、「来年は私は来ません。旦那をよこします」と言ってくださって、本当に夢というのはいろいろな人を動かす力があるなと思いました。映像や画像を使って、皆さんにその人の思いと作り出したい世界を伝えていくというのがドリブラです。賞金は出ませんし、優勝者もありません。なぜかということ、本当に必要なことはお金ではないからです。共感と感動というのが大事で、それが集まることによって、お金などもその後について来るという仕組みです。茨城にも「いばらきドリブラ」というのがありますが、今日は、そこでプレゼンターをやった田中さんが来てくださっているので、ぜひ、その世界を少し感じていただければと思います。

(柚山) では、田中さん、お願いします。私たちは「よしこたん」と呼んでおります。

田中氏発表



(柚山) よしこたん、どうもありがとうございます。皆さん、お手元にメンターカードというものがあるので、これにメッセージを書いていただきたいと思います。今日は同じくいばらきドリブラに出た、ちゃんみよが応援に駆けつけてくれています。ちゃんみよ、このメンターカードにはどんなことを書いたらいいか、説明していただけますか。

(ちゃんみよ) このメンターカードには、皆さんが感じたことを、本当にそのまま書いて、先ほど発表して下さったよしこたんに思いが届くように、自由に書いていただければ大丈夫です。ただ、メンターカードなのでマイナスなことは言わないで、励ませるような、そんな素敵な言葉を送っていただけると、発表している私たちはすごく幸せです。ドリブラは本当に素敵なイベントですので、皆さんも機会があったら、ぜひ実際に見に行っていたきたいと思います。

(柚山) それでは、パネルディスカッションを進行させていただきます。つくば環境モデル都市、そしてつくば 3E フォーラムは、2030 年を目標年に掲げています。さまざまな活動を通じて、温室効果ガス排出量を半減させようとしています。そういう社会はどんなイメージでしょうか。遠藤さん、小久保さん、中野さん、自己紹介も兼ねていただきながら、夢見る 2030 年の社会像を語ってください。

夢見る 2030 年の社会像

(遠藤) 私は、下妻でいちごを作っている農業者です。ストロベリーフィールズという、小さいですが法人という形でやらせていただいております。代々農家だったわけではなく、15 年ほど前に新規参入で農業を始めさせていただきました。気が付いたら 15 年たっていて、早いなと思います。2030 年、どんな社会を目指すべきかということですが、恐らく高度経済成長というのはいもう二度とないことで、日本もアジアもそうですが、結局、これからの

豊かな社会というのは、農村が豊かになっていくというか、地域が豊かになっていくことが一番なのだろうと思います。成長がない中でどう豊かになっていくかが一つのありようだと思っています。ただ、何か新しいものを作るというよりも、今まであるものが最大限に生かされていく時代なのではないか。実は、必要なものというのはいもう既にあるのだろうとっていて、使っていなかったり、忘れ去ってしまったり、置き去りにしているものがたくさんあると思います。そういうものに一つ一つ気付き、大事にしていくようになっていく、進歩というよりは、変わらないために変わり続けるというイメージなのです。つまり、大事なものを伝えていく、残していくために、みんなで知恵と工夫を出し合いながらやっていくということです。小久保さん、農業などはそうですね。必死でいろいろやっているのですが、実は守っていききたいもの、残していききたいものがあるというところが非常にあります。本当に大事なものは、もうあるのではないかと感じているので、創造や大きく変わるというより、より深く入っていく、「進化」ではなく「深化」していくのではないかと感じています。

(小久保) 筑波農場の小久保です。皆さんに、農業生産法人筑波農場という私の会社のパンフレットを配らせていただきました。非常に柔らかいイメージのマンガで、自分の思う、うちの農場のイメージということでパンフレットを作っています。概要を少しだけご説明させていただきます。私は、つくばの北部地域で水田をずっとやっています。代々農家の長男として生まれ、今は約 62ha を耕作しています。これは、東京ドームで大体 12 ~ 13 個分といわれています。これだけの面積になったのは、ここ 30 年ぐらいのことです。最近の農業環境の流れとして、農地集約が進み、たくさんの面積を作るようになったためです。30 年前の私の家は 1 ~ 2ha ぐらいしか作っていなかったもので、時代の流れとともに成長してきた、規模を拡大してきた農家なのかなと

思っています。そういう中で、環境の部分での私の取り組みを、少しご紹介させていただきます。その一つがレンゲ農法といって、昔は当たり前にあった農法です。今は化学肥料が非常に発達・浸透していますが、レンゲを栽培してすき込んで、あまり化学肥料を使わないという農法で主に農作物を栽培しています。こうした昔ながらの製法を使い、昔を学びながら生産するというに加えて、農研機構との連携もしています。ロボット田植え機やGPSで動くロボットのコンバインなどを使わせていただいています。研究所と連携できることも、つくばらしい農業なのかなと思っています。正直、これからだと思っておりますが、実証実験の中では、苗を積んだ田植え機がボタン一つで田んぼに入って、周りまで植えて出てくるというような、夢のような田植えをしたこともありますので、いろいろなところと連携しながら進めていくことで、面白い、つくばらしい、他にない農業も今後の魅力としてあるのではないかと考えています。

(中野) 私も柚山さんと同じ農研機構に所属しております。研究をしているのですが、皆さんご存じのハウス栽培、いわゆるビニールで覆った環境で野菜がどう育つかという研究をしています。先ほどリンゴの話にもありましたが、今、冬でもトマトが食べられるのは、自然環境ではなくハウスを使って、環境をある程度、制御しているからです。それは国民にとってみれば、健康に良いなどプラスの面もありますが、実際、トマトを一つ作るのに、同じぐらいの重さの石油が使われているのです。そこで私は、化石燃料を一切使わずにトマトができないだろうかと考えています。今回のテーマでもありますが、代替エネルギーをうまく使える技術ができて、2030年には「このトマトは一切石油を使っていません」と言えるトマトができるといいなと思っています。

(柚山) ありがとうございます。2030年に向けてと自己紹介をしていただきました。次は、夢を

語るということで、ドリームプランプレゼンテーションをよこたんにしていただきましたが、遠藤さんの夢と戦略をお聞かせいただきたいと思えます。

これからの夢と戦略

(遠藤) イチゴ農家なので、一つはイチゴに関する夢です。私は、日本のイチゴと海外で食べるストロベリーは、別物だと思っています。イチゴというのは、日本人が作り出した一つの食文化になっていると思います。うちは「笑顔を増やすためにこの仕事がある」というのをテーマにしてやっています。イチゴで笑顔を増やしたい。これは、日本だけでなく世界にも通用するものだと思っていて、日本の農産物の良さを伝えるために、貢献できるすごい力があると思っていますので、できるだけいろいろな場所でイチゴを作りたい。自分が全部作れるかどうかは別ですが、作る仲間を増やしていきたいというのが一つです。もう一つが、世界農業ドリブラというものを増やしていきたいのです。夢でつながった仲間はすごく強いのです。私もいろいろなことをやっていますが、やればやるほど、自分がいろいろなことができなと感じます。ただ、自分でできなくても、できる人が実は周りにたくさんいるのです。本当にやりたいこと、やらなければいけないことがあって、それをやろうとしていると、自然と応援して下さる人が増える。ドリブラでいろいろな人の夢を見ていると、本当に純粋な夢、みんな受け継いできたものがたくさんあって、どうやっていいかわからないけれども、やらなければいけない、僕は絶対にやるのだという人がたくさんいるわけです。そういう人がたくさん増えて、普通に茶飲み話で、畑で夢があふれるようになったらいいな。それが日本だけでなく、世界中に広がって欲しいのです。先ほども言いましたが、経済成長で世界が豊かになるというのはもう無理で、農村がいかに豊かに



なるかということだと思うので、そこに日本の農業者が果たす役割は、結構いろいろあるのではないかなと思っています。ですから、昨年に1回目を開く前から、農業ドリブラを世界各地でやると宣言して始まり、むちゃなことを平気で言うわけですが、言っているとだんだんできる方向に勝手に回って行くのです。日本の農業者が、何を世界でやりたいかという、アジアの農村の人たちが夢を語って、本当に「いいな」という夢に対して日本人や日本企業がお金を出してサポートすることです。その夢が実現していったら、アジアの農村も良くなりますし、日本もますます世界から「いい国だね」と言ってもらえますし、下手なODAをするよりも、地域にとってよほど良いことだと思います。時々、アジアに行くのですが、農業者は、すごく歓迎されるのです。「好きなだけ土地を貸すから、ここへ来て作ってくれ」と言われるほどです。なぜそんなに歓迎されるのかと思うと、それはやはり今までの日本人の先人の生き方と一つ一つ積み重ねてきたものがあって、日本人は誠実ですごくいい人だ、うそがないと思ってもらえています。別に私のことを信用しているのではなくて、今までの日本人一人一人が積み重ねてきたこと、清貧の思いで作ってきたこと、売ってきたこと、その一つ一つが評価されているのだなと感ずるのです。日本人で農業者であることによってやれること、できることはたくさんあるはずですので、仲間をたくさん集め、日本と世界がつながっていければと思います。そして、いろいろな人がつながることによって、少しでも良い時代を次の世代へつないでいきたいと思っています。

(柚山) 本当に不思議ですが、向かっていくのですよね。では小久保さん、お願いします。

(小久保) うちの農場の夢ということでお話させてもらいます。今やはり規模拡大ということですと来ている部分もありますが、面積のことで言いますと、日本では100ha以上でメガファーマーと言われるので、まずは、その位の面積を目指していき

たいと思っています。現在も生産したものを自分で、消費者あるいは飲食店などに販売させていただいておりますが、作ったものを直接消費者に顔の見える身近な形で販売することができればと考えております。私からは、特にお米についてお話しします。お米は等級が1等、2等、3等と、等級で値段が左右される部分が非常にあります。等級が3等だから悪いわけではなく、1等だからおいしいということでもなく、見た目の評価の等級なのです。ですから、見た目での出荷の部分から、実際の食味としての評価をして販売できるような社会仕組みみたいなものに皆さんの空気になっていくといいなと思っています。自分は自分なりのブランド、オリジナルブランドで売らせていただいておりますが、皆さんで品質、食味を上げる取り組みをして、つくばやこの近隣地域のお米が非常においしいということがさらに皆さんに浸透するようになればいいと思っています。お米の消費が非常に少なくなりつつある中で、日本食も見直されてきておりますし、お米の魅力をいろいろなことでみんなに伝えるような取り組みをしたい。そんな思いから米粉を使ったカステラなどの商品開発の連携をさせていただいております。6次産業ということで国が非常に力を入れている部分でもありますし、いろいろな方々と連携して魅力を発信するということで、筑波山の鳥居の前におむすび屋さんを建設しようと、今月いよいよ着工し、少しずつ頑張っているところです。筑波山は観光の場所でもあります。店舗名は、「縁むすび」と付けさせていただきましたが、店舗からこの地域の光るダイヤモンドのような、皆さんのいろいろなものが発信できるような店舗づくりも今後作り上げていきたいと、そのように考えている次第です。

グリーン・イノベーション構想

(柚山) ありがとうございます。私は中野さんと同じ農研機構に勤めています。若いときは自分で実



験していたのですが、最近は地域づくり、いろいろな人の力を借りながら、農村地域がお金の面でも潤うよう、すごくコラボレーションを意識しています。また、化石資源の投入があまり許されない時代になってきておりますので、例えば環境保全型農業の推進、個々の技術開発の促進、ソフト対策、再生可能エネルギーの利用、田園都市空間の整備など、全部を通して投入エネルギーをトータルとして減らす取り組みとともに、投入を再生可能エネルギーで補いながら、投入化石エネルギーに対する産出の割合を大きくしていこうと思っています。かつて、水田農業に代表される日本の農業は、エネルギー生産型だったのですが、化学肥料の投入や機械化によって、エネルギー消費型になっています。投入量は一緒でも中身を変えることによって、農業・農村をエネルギー生産型に持っていくような仕組みづくりに貢献したいと思っています。小久保さんの活動の様子を見ていると本当にコラボが多いのです。環境モデル都市をうまくやろう、バイオマスや再生可能エネルギーの導入を進めようと思っても、なかなか単独ではできません。しかし、遠藤さんの話のように、共感を得るようなプランであれば応援してくれる仲間ができてくる。例えばバイオマス利用あるいは農業とスポーツ、つくばFCと小久保さんのところがコラボするとか、防災や文化や芸術など、いっぱいつながることがあると思うのです。つくばの地域力を活かすということは、相乗効果の発揮かと思っています。さて、つくばのグリーン・イノベーションを考えるとということで、1枚の絵を示させていただきます。つくば3Eフォーラム事務局レベルの案ですが、いろいろなタスクフォースが今まで積み重ねてきた力、技術、ノウハウを結集してやりたいと思っていることがあります。各地で自然エネルギーを導入する、バイオマスを導入する、これを今日の午前中の石田先生のお話にありましたが、技術開発と全体の仕組みづくりをしながら、農業あるいはつくばの社会に展開する。そして市民との関わり

があるような活動もしていく。ここには中野さんの脱石油農産物もできたらいいなと思うわけです。午前中、石田先生が筑波大学の中の拠点で藻類バイオマスの培養、そこからいろいろなエネルギーを作るという実証・実験をされているというお話がありましたが、市民との接点ということからすると、各種作られたエネルギーがトマトやイチゴになっていて、ノーベル賞受賞者やオリンピックのメダリストなども立ち寄って、みんなで収穫経験をしながら、環境モデル都市の四つ目の目標である教育の分野などにもつながればいいと思っています。つくばのグリーン・イノベーション、さまざまありますが、今日はこれをイメージして中野さんに構想をご披露いただきます。

(中野) 先ほど、概要をご説明させていただいたのですが、今、地球には太陽のエネルギーが降り注いでいて、その過去のエネルギーが石油として蓄積されているわけです。こういうハウスの中の暖房は、今、化石燃料に依存して、それがトマトになっているのですが、私はつくばならではの可能性として、別のルートがあるのではないかと考えています。遠藤さんから夢やビジョンが非常に重要だということが語られ、また、柚山さんから、つくばを魅力的な町にするためのいろいろな素材があるということが紹介されましたが、そういういろいろな組み合わせを、皆さんそれぞれ考えていただいて、こんな夢があるということ、皆さんで共有できればいいかと思えます。その一つとして、スマート・アグリカルチャーということで、先端農業を利用することをうたってはどうかと思います。つくばとして、やはり科学技術の一つ打ち出してはどうかと思います。例えば、自然エネルギーを利用した脱石油の生産体系を何かつくばから発信できないか。それには一つのアイデアとしてイチゴなどもあります。施設生産なども一つ大きなテーマでしょう。また、先ほどアップルパイの話でオーガニックということも言われましたが、そうした非常に優れた品質

のものを使っているといった特徴を出しながら、つくばならではのものを作り出せないかと考えています。今、単純に考えているのは、例えば、藻類バイオマスの中にできてくるエネルギーや残渣、どうしても油を取った後に余ってしまうものができるので、そういったものを総合的に利用して野菜の生産ができないか。100%藻類バイオマスからできた「藻トマト（藻野菜）」のようなものができると思いませんか。私がこういったことを言うのは、最初に遠藤さんが言われた志はものすごく大切だと思うのですが、もう一つ重要なのが遊び心だと思うのです。先ほど小久保さんが言われた「縁むすび」。「縁むすび」を食べたら結婚できたとまでは言わないのですが、彼氏ができた、彼女ができたという実績をどんどん積み上げたら評判になるかと思って、そういった遊び心も入れながら、問題にも真面目に取り組むことが重要です。藻類バイオマスについては、残渣を利用するというので、私の研究でも、トウモロコシからできた液肥を利用してトマトを作ったという実績もあります。また、エネルギー分野では、先ほどから出ていたペレット暖房なども、積極的に藻類と連携させて利用し、トマトのハウス栽培で使っていくということで、幾つか高付加価値になるような機能性成分も付与したり、アイデアを入れながら、つくばならではの技術を組み合わせようということです。エネルギーや肥料の元は藻類で、それを経由してトマトになる。藻類だけに限らず、今日、紹介があったソーラーエネルギーでもいいと思いますが、そういったつくばならではの技術を総合的に生かして、何かこういったものを打ち出していくのが良からうと思います。今、国際戦略総合特区関係で、食農環境プロジェクトを有志で作って、こういったものを作ったらどうかというのを考えています。一つはアグリサイエンスパークで、つくばならではのということであれば、研究機関がありますので、こういったものをコアにして、農場へのアドバイス等は、サイエンスパークでやりますと。フード

バレーの話は新潟県新潟市の講演の中でもありましたが、加工・販売というところは、確かなブランド化したものを売っていく。こういったサイエンスパークとフードバレーという形で何か仕組みを作り、つくばならではの技術を現実のものに落とし込んでいくことを考えています。

スマート・アグリカルチャーの実現に向けて

(柚山) つくばの力を結集できるやり方とし、スマート・アグリカルチャーというものを紹介いただきました。会場の皆さまにも少しずつ発言を頂きたいと思っています。このスマート・アグリカルチャーという取り組みが、いかにしたら価値のあるプロジェクトになるか。あるいは皆さん方が持っておられるハードの技術や人脈など、コラボの可能性に関する意見、情報をお寄せいただけますでしょうか。話されたい方は、私に何らかの意思表示をお願いしたいと思います。さて、中野さんから、先ほど、提案が一つ出ました。今日のつくば3Eフォーラム会議では、あまりこの絵は出ませんでした。いつもよく出てくる絵で、四つのつくば国際戦略総合特区の中の一つが藻類バイオマス利用ということで、つくば3Eフォーラム議長の井上先生、渡邊先生ほか、多くの方で進められているものです。つくば市役所の梅原さんからありましたが、現場実証もいよいよスタートということです。実は私、最近ジョギングなどをしているのですが、ちょうどそのコースに当たって、何ができるのだろうと思っており、フェンスが張られて、取組が進んでいます。それでは遠藤さん、スマート・アグリカルチャー、こういう絵などを見て、人、技術、制度、情報、資金、具体化するとすればどんなことを考えていったらいいのかという助言、ヒントみたいなものから語っていただけますか。

(遠藤) 技術の進歩はすごいのですが、時々、いろいろな技術が持ち込まれて、一瞬で没になるもの



が結構あるのです。それは、全く現場で必要とされていないことを、予算が付くからといって開発していることが多々あるからです。まず、そういうものは、なしにさせていただきたいのです。現場で何が必要か、現場の問題点が何かなのです。何ができるから発想するというのもありなのでしょうけれども、現場からすると、それを持って来られてもとか、もっと安い方法でいいのではないかということが結構あるので、開発段階から現場のニーズとのすり合わせをすることが一番大事だと感じます。

(柚山) 遠藤さんは、ハウスでイチゴを作られているということで、今、もうお客さんがついて作られているのですが、何か次に工夫をするとか、何か新しい技術を入れようと考えているものがあるとか、イチゴ栽培の中で何かありますか。

(遠藤) 品質については、常に向上を目指さないと悪くなってしまいます。小久保さんは、作られて分かりますが、気象条件が悪化していて、正直言うと、年々作りづらくなっているのです。同じに作るには、前の年と同じにやっていたら全然駄目で、そういう点では現場は、毎年イノベーションです。前の年のことは通じないし、5年前、10年前のことは全く通じない。毎年手探りという状態になっているので、現場は必死です。同じにやっていたら生き残れない、生産し続けることすら難しい。気象条件も変わっていますし、あと2~3年したら、九州のイチゴ栽培技術を本格的に取り入れなければいけないとか、いろいろなことを考えます。それぐらい変わっています。ですから、こうなったらこうしよう、ああしようという選択肢を常に持っていないといけない。そういう点では「何をしますか」ではなくて「何をしなくてはいけないか」に近くなっているところはあります。今のところ、自然には追いつまられています。

(柚山) 小久保さんはこういう施設園芸というより、土地利用型農業でお米づくりをされています。しかし、一方では6次産業化と言えますが、できた

お米からいろいろな商品開発をされています。今後の展開についてお話しください。

(小久保) やはり生産の部分では、今お話があったように、現場の中ではいろいろあります。ただ、お米を生産する中で出てくるもの、例えば米ぬかやもみ殻をうまく使って燃料にするといったことができたらいいとはよく思います。実際に、アイガモ農法などをやっていますが、米ぬかは、もう一度田んぼに還元すると、肥料をやらなくてもまたお米ができるぐらい力を持っていますから、そういう意味では、お米を作りながら出るものを活用してもらうことがあると、何か夢が広がるような気がします。

主体形成

(柚山) 中野さん、研究機関としては技術開発というのはベースになくってはならないですが、最後に見せていただいた絵を見て、担い手、どういう人たちが具体的に生産から消費まで入り込むことができるとお考えですか。例えば、つくば市のどういう仕事に従事している人に乗り込んでもらう必要があるとか。

(中野) こういうプラットホームというか、みんなが寄り合えるような場所を作っていただいたときに、私は若いとか若くないというのはあまり関係なく、やはりやる気の問題だと思うので、やる気のある人が集まって議論できる場。そういうときに、先ほどいろいろ出ましたが、6次産業化というのは一つキーワードです。そうするときに、いかに売れるものを作るかというセンスは重要だと思いますので、それは農業経験がないと駄目というよりも、むしろ売るセンスといったものは、農業経験がないの方がいいかもしれません。そういった人材を集めたり、教育したりということは重要だと思います。先ほど、小久保さんがお米を等級で判断してくれるなどと言っていました。それでおむすび屋をやるといのは、非常にいい発想だと思って聞いていまし



た。加工してしまえば外見はマスクされてしまっ
て、味が重要になるのでいいと思います。これもや
はりとらえ方です。今日のリサイクルの分別の話も
そうですね。混ぜればごみだけれども、分ければ
宝になる。本当は捨てるようなものも、見方を換え
れば宝というのはいっぱいあって、例えば傷のつい
たリンゴを、傷といえば傷だけれども、これを「え
くぼが付いたリンゴ」と言って売っているところも
ありますね。トマトでいうと、尻腐れ果というのが
出てしまうのです。水を絞って甘くすると、どうし
てもお尻のところ少し黒くなったりするのです。
これは逆に言うと、おいしいトマトです。ぎりぎり
で作るとそんな感じになってしまうのです。外見は
悪いけれども、非常に糖度が乗っているというこ
とで、お尻に少し傷があるのはおいしさの印だとい
う売り方をしているところもあります。ものとい
うのは、見方を換えればそこに商機が生まれるこ
とは、往々にしてあるのです。そういったセンスは、農
業者ではできない部分もありますし、そういうセン
スを持っている農業者もいますが、やはりいろい
ろな方が集結して、こういった商品もできるのでは
ないか、「縁むすび」いいではないか、彼女がする
のではないかとか、そういう楽しい乗りも含めて、
いろいろな人が集まってくる場所にしたいのでは
ないかと思います。

(柚山) 遠藤さんから、こういう仕組みができた
としても現場が必要なもの、困っているものとい
うか、手を出しやすいものでないと、実際には実現
しないというお話がありました。そういうことからす
ると、これをつくばで展開する場合、研究機関は、
何か目標があったら、自分たちが提案すること
もありませんし、こういうものを開発してほしい
というふうに目標が設定されたらみんな頑張る
のであると思いますが、この絵に誰か農業生産
法人なり、これに飛び込んで来てもらうた
めにはどういう展開にしていけばいいので
しょうか。

(中野) これはまだまさに青写真、イメージのレ

ベルですので、これからこれを見ていただいて、こ
ういったことができるのではないかとか、もっとこ
うしたらいいのではないかという意見を逆に私は頂
きたいと思っています。

(遠藤) もう一つあるのですが、いろいろな素晴
らしい仕組みがあって、周りが支援態勢を整えて、
「さあ、どうぞ」というのが結構あるのですが、そ
こで農業者自身が本気でやる気がないと、周りだけ
が突っ走っていて、農業者がだんだんついていけな
いと脱落していく事例が多々あるのです。周りが整
え過ぎて、「これをやったらいいね」、「ここにいい素
材を持っている人がいるから、あなた入って」と
引っ張り込まれた農業者は意外と途中で脱落するの
です。その部分の足並みが揃うかどうか非常に大
事になるのではないかと。そういう熱い思いの農業者
と一緒にやられることが大事です。

(中野) おっしゃるとおりで、これを議論してい
る中では、大学の先生と私たちと民間の企業の方も
いらっしゃいますが、実は生産者が抜けていて、そ
こが一番痛いところなんです。やはりそれに二の足を踏
む方がほとんどで、そういった方をいかに引っ張っ
てくるのか。自分たちで作るのか。なかなかその
人材というのが一番難しいですね。

(遠藤) そうなのです。農業は応援する周りの者
がいっぱいいいて、応援される側の腰が引けている
という非常に残念な状態がよくあって。

(柚山) 何か全部準備されたものに「どうぞ」と
言われてもということですね。では、会場から声
を聞かせてもらいましょう。山本さん、島田さんの
順番をお願いします。

連携に基づく商品開発と販売努力

(山本) 筑波大学で教員助手をやっております山
本泰弘です。僕の意見ではなく、他人のアイデアを
ご紹介するという形でお話したいと思っています。中
野さんの最後のスライドの図の話が今あったので、



お伝えしたいと思っていたのです。いろいろな人を関わらせる、関わってもらおうというお話の中で、群馬の大学の女の子のアイデアで、評価されたものがあります。元のアイデアは直売所を想定していたのですが、6次産業の場と子育ての拠点を重ね合わせたらいいのではないかと。どうしても男性中心だったり、研究者、農家という、40～50代の男の人を想像してしまいがちですが、商品を生み出す、ユニークな品物を生み出すという意味でも、女性の視点が必要ではないか。シニアの子育てを引退された方、仕事を引退された女性が若い人と共に子育てをする。そこに女性だけではいけませんから、お父さんもおじさんも。そういった6次産業と子育てを一体化して、しかも子どもにも関わってもらって、次の世代の担い手を育てるという効果もあるのではないかというアイデアを僕がもらう機会があったのでお役に立てればと思ってご提供した次第です。ちょうど若い人も多いです。

(島田) バイオマススタスクフォースの委員を今年からさせていただいている島田(敏)といいます。いばらき自然エネルギーネットワークの事務局もやっています。私は地域で商工会の活動などいろいろなことをやっているのですが、茨城の場合でも自然エネルギーのことをやると、主体がないというのが一番の問題になってきていると思って、どうしたら主体形成ができるかを考えてやっています。先ほどの話も同じで、農場にやって来てくれる主体という議論をされていると思いますが、先ほど「ソーラーシェアリングをブルーベリーでやりたい」という話がありましたが、そういう方が主体だと思うのです。そこは自分が生産できる圃場と果樹を持っていらっやって、その上にソーラーシェアリングの施設を作ったら、もうそこから実験が始められる、そこまで準備が整っているのです。その中で生産ができる体制、人と地面がつながって動ける体制が出来上がっているところを発見して、そこにあらゆるものを集積するのではなく、ばらばらになるかもし

れませんが、それぞれに拠点を形成していった、そこを研究に使わせてもらいながら、出てきた成果をいろいろなところに発信し、農家の方にももらっていただくというやり方がいいのではないかと思います。きちんとした場所をどんと作るのではなく、むしろばらばらに動いて、やる準備ができていて、部品が一つか二つ揃っているところに、研究の拠点を作っていくのがいいのではないかと思います。もう一つは全く違うのですが、先ほど「藻からトマト」というお話が出ていましたが、私たちは隣の筑西市でソーラードライヤーの取り組みをずっとやっています、太陽熱で乾燥させる木製の箱を一生懸命作っているのです。藻からできたトマトをお日様の光でドライトマトにして、次はパスタまでというお話ができてくると、ぐるっと回っていいかと思います。ブルーベリーも同じようにドライブルーベリーにして、目にいいドライブルーベリーということで売ったらいいかなと思って、紹介だけさせていただきました。

(中野) まず加工について、野菜はやはり価格が高くなるときの安くなるときの変動が大きいので、保存技術は非常に重要で、一つはドライの観点は極めて重要で、ぜひ、そういったものを組み合わせて、6次産業とばっちりだと私は思いました。先にご発言いただいた子育てとのコンビネーションや、後の方のプロジェクト的に組み合わせるという話ですが、私はやはり公的な組織のフットワークのなさというか、いいなと思ってすぐに取り入れれば、明日からできるようなことでも、なかなか難しいと思うことが多々あります。それは大学でももしかしたら同じかもしれません。いろいろな承認を取らないと事が進まないというのがあるので、やはりしがらみがないような組織で、個人で協力できる研究者として、個人として何かできるというプラットフォーム、流動的機動的な組織が求められているのではないかと思います。いつまでたっても分からないようなことをずっとやるというのも、確かにそれは重要かも



しませんが、今、現場で求められているような、生のリアクションができるような機動的な組織をどこかに作っていく必要があるかと、お話を聞いていて思いました。

(柚 山) 小久保さんにはいっぱい仲間がいます。小久保さんのフットワークの軽さというか、ステップワークの良さというのは、何なのでしょう。

(小久保) 楽しくやりたいというところが一番でしょうか。異業種の方も含めて、いろいろな方々と情報交換することで、新たな可能性が出てきて、それがきっと6次産業なのだと僕は思っています。生産者から言うと、何か違ったことをしようとする、儲かるかどうかをまず考えるのだと思います。そういったことを考えつつ、ちょっとしたチャンスを手携しながら見出ししていけるような期待をしながら、いろいろなことを取り組んでいるのが現状でしょうか。

(柚 山) よしこたんのアップルパイを家内の誕生日に食べました。やはり心のこもったもので、よしこたんを知っているだけに、味わいがありました。お値段はさすがに少し高いのです。しかし、うまくやろうと思ったら、ボランティアでいっぱい作るには限界がありますから、それなりの値段で買ってもらうなければいけません。しかし、作ったものが売れ残っては困ります。そのあたりはどういうふうにされているのでしょうか。応援団を得て、販売、営業、食育など心の部分は置いておいて、現実問題として売れ残らないようにするにはいけないのでしょうか。

(田 中) いまだに、もがいてはいるのです。金額的にはなぜこの金額でやっているかという、予約販売しかお受けしないというのが私の主義なのです。ですから売れ残らない。結局、そこが今、私が何とかこの金額でやられている、ぎりぎりのところなのです。作ったものを販売所に出すとか、大手の販売店を使うといったことをすると、そこに大量に出しますよね。そこで残ったものも自分のところ

に戻ってくることを考えると、やはり金額はすごく安くしない、生産者、製造者として、経営が成り立たないという、一番厳しいところに行ってしまうと思うのです。そのところを私はやりたくないというのが一番初めにありました。あとは私のアップルパイは、2,000個と言いましたが、現在ではもう3,000個を超える量の試食を皆さんにさせていただいて、どんどん味を追求していく。その中で「次はこんな味にしてくれるのなら食べたい」とかという話が出てきて、そこでそれを買っていただくというような、変な循環スタイルになってきています。ですから、皆さんから、私のアップルパイは毎回味が違うと言われるのです。それは、そのときに一番おいしいリンゴを使っているからです。ということは、一番安定している金額のものを必ず使うということ。変な時期に使うと、結局は高いものや、味の良くないものになる。それは絶対に自分の中では避けたい。ですから時期的に厳しくなるころには、今度は冷凍作業が始まります。それも地域の一番売れているケーキ屋さんのオーナーシェフから「こんなふうにした方がいいよ。あんなふうにした方がいいよ」と、逆に教えていただくことがすごくありました。普通そんなことはあり得ないと思うのです。結局は敵ですから。自分のところの商品が売れなくなるのに私を応援するというのは、あり得ないことだと思います。ただ、それをしてくれるのは、私自身の生き方というか、シニアになってからの第二の人生のスタートということで、大目に見てもらっている部分も確かにあります。ですが、自分の中でぶれないものを持つことで、今、私は製造しています。それで何とか今に至っています。

(柚 山) つくば市民の方はご存じでしょうけれども、つくば市は天子町と協定を結んでいろいろな環境活動をしています。アップルパイは、天子町のリンゴで作っておられるのですよね。会場の方から発言されたい方はいらっしゃいますか。

(根 本) 先ほどのブルーベリーの根本です。今、



その図を拝見させていただきまして、実はそういう構図はかなり以前から議論されている中身だと思います。先ほど申し上げたように、つくば市のブルーベリーもここ12～13年の歴史で、そこに行政が入っているかどうかは分かりませんが、生産者と消費者をどう結び付けていくか。それから生産から消費に至るまでの間に、実はブルーベリーの場合は、男女共同参画というのが入りました。小さい果物ですので、ブルーベリーを好む方は女性が中心です。その消費者心理が分かるのは、やはり生産者も女性だろうということで、つくば市の場合、ご主人は大規模農業にずっと取り組んでおられますが、農家女性の社会的自立というテーマも挑戦としてあった中で普及だったかと思います。余談ですが、先ほどの学園都市50周年のあれにもありましたが、国際会議場が2000年にオープンし、ぜひ地元としてもシンポジウムを持ってみようということで、全国大会を開きました。そのときは、まだ数人の生産者で、私もその1人だったのですが、それを各地の農家や行政の方が見ていまして、つくば市に一時期、いろいろな注目が集まりました。その一つに河口湖町という富士山のふもととの河口湖を抱えている自治体があり、つくば市がスタートして数年後に、つくば市からブルーベリーの苗を持ってきて産地化を目指したのですが、数年後に私どもで訪ねましたところ、何とブルーベリー一つ取っても200ぐらいの商品開発がされていて、さすが観光地だなとい

うのを実感しました。つくば市といえば、いまだにワイン一つ作るところに至っておりません。ではどこが違ったかということ、河口湖の場合は、生産者と商工業者、加工業者が、本当の円卓会議という形式を取って商品開発を進めたと聞いております。そのように考えますと、やはりその構図を実現させるためには、やはりコーディネーター的な役割が重要になってくるのではないかと拝見しました。

(柚山) 根本さん、ありがとうございました。人、技術、制度、情報、資金をつなげて、今日はドリブラから頂いたキーワードとして共感・感動、松岡さんのソーラーシェアリング、感動がプラス1としてありました。こちらの五つのキーワードは、ドリブラが要求しているものです。「社会的貢献度が高い」、「独自の価値・魅力」、「発展性」、「実現のための準備」、「人生観とリンクしている」というものです。右側はソーシャルシフト、斉藤徹さんの『BEソーシャル!』という本がありますが、今までの世の中、価値観を変えてみようということで、理念は自立、組織は透明に、事業は共創、価値は情緒、目標は持続的であるべきというものです。こういうことを意識しながら、つくばの地域力を活かして、つくばの夢をみんなで叶えていきましょう。パネリストの方々、ご参加の皆さん、ありがとうございました。今日のパネルディスカッションは、これで終わらせていただきます。

遠藤 健二「世界農業ドリームプランプレゼンテーション」

世界農業ドリームプラン・プレゼンテーション 2013
開催概要

セミファイナルステージ(予選)

開催日10月23日(水) 観覧者200名
会場 日比谷コンベンションホール
(千代田区立日比谷図書文化館)
発表チーム数 20チーム
・ファイナルステージ(本選)への選考
審査員による選考会

ファイナルステージ(本選)

開催日10月24日(木) 観覧者1,000名
会場 東京ビッグサイト レセプションホール
発表チーム数 8チーム
・福島正伸氏講演
・大賞選考
来場者の投票と審査員により「感動大賞」「共感大賞」を決定
・感動と共感の展示ブース設置(予定)




13

10月24日 ファイナル
会場：東京ビッグサイト レセプションホール 来場者：890名 (1,000人収容)





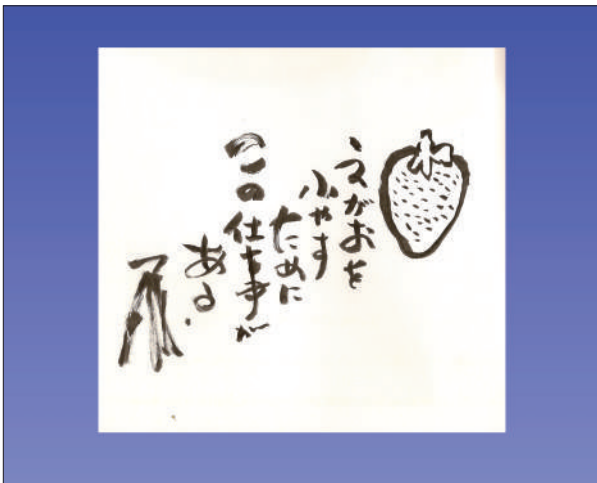

【感動大賞】
上野 裕「乳と蜜の流れる地プロジェクト」



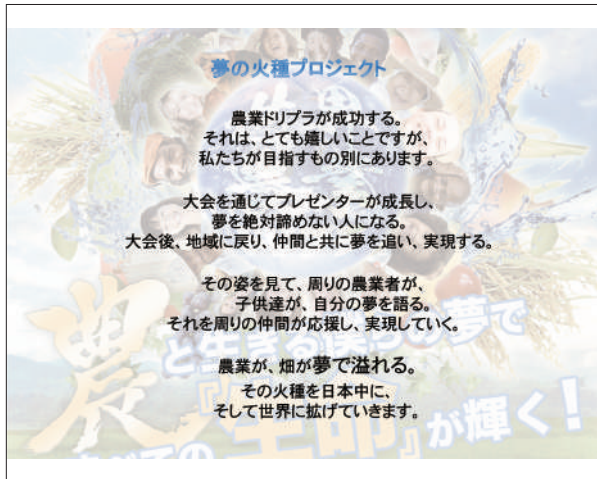
【共感大賞】
水木たける「SEFA スモール・エクセレント・ファーマーズ・アライアンス」



遠藤 健二「夢」



遠藤 健二「夢」



夢の火種プロジェクト

農業ドリブラが成功する。
それは、とても嬉しいことですが、
私たちが目指すもの別にあります。

大会を通じてプレゼンターが成長し、
夢を絶対諦めない人になる。
大会後、地域に戻り、仲間と共に夢を追い、実現する。

その姿を見て、周りの農業者が、
子供達が、自分の夢を語る。
それを周りの仲間が応援し、実現していく。

農業が、畑が夢で溢れる。
その火種を日本中に、
そして世界に広げていきます。



夢の火種プロジェクトの未来

世界農業ドリブラはアジアへ

日本の農業者とアジアの農業者が一緒になり
アジアの農業を、農村を元気にしていきます。

カンボジアを皮切りに●ベトナム、タイ、インドネシア、
ミャンマーへ、順次世界各地で開催していきます。

夢の火種は世界中に広がります。



そして
繋がっていく
繋いでいく

中野 明正「グリーン・イノベーションを考える」

第7回つくば3Eフォーラム グリーンイノベーションを考える ～地域力を活かした産業創成～ 農研機構・野菜茶業研究所 中野明正

2014年1月25日(土) 於:つくば市役所

「つくばの地域力の活かし方」 先端農業の視点から

つくばを魅力的なまちに！夢やビジョンを共有！

つくば3Eフォーラム委員会
 最先端農業「スマート・アグリカルチャー」に
 バイオマス、太陽エネルギー、都市構造・交通システム、
 エネルギーシステム評価(タスクフォースでの成果)

- 2030年の社会像、夢に向って歩んでいる戦略は？
- 人、技術、制度、情報、資金をつなげて実行する作戦は？
- キーワード:

資源:自然エネルギーの活用(脱石油、資源循環)、
 生産:施設園芸(生産効率向上)持続的生産(土壌診断)
 販売流通:品質保証、6次産業化、マーケティング

脱石油トマトを作りたい

も やさい
 100%藻トマト(藻野菜)

バイオマス副産物の有効利用

地域システムとして成立させるためには必要
 処理の観点ではなく、**使い尽くす**、有効利用の観点から

徐添加元素と予添加元素

- キーは**窒素の分施用**(徐添加=量管理)
- 比較的不活性な元素は事前施用(予添加)

トウモロコシから糖を精製

家庭菜園などへの普及用の商品も開発

つくば発循環型農業(普及版)

施設園芸との連携イメージ循環システム

| 現状 | 具体的な取り組み |
|------------------------------------|--|
| ●比較的均質で安定的な資材としての藻類残渣 | ●藻類残渣の評価 ●肥料としての有効利用(液肥) |
| ●新たな用途開発で、藻類循環を加速 | ●新規の知見を導入し生産の効率化 |
| ●残渣に含まれる機能性成分の利用 | ●残渣に含まれる機能性成分の動態から高付加価値野菜の生産 |
| ●土壌診断を実施 ●藻類残渣を中心として利用した栽培事例はない | ●栽培前後で診断をして評価 ●より簡便(電力不要)でメンテナンスフリーの栽培システムを開発 |

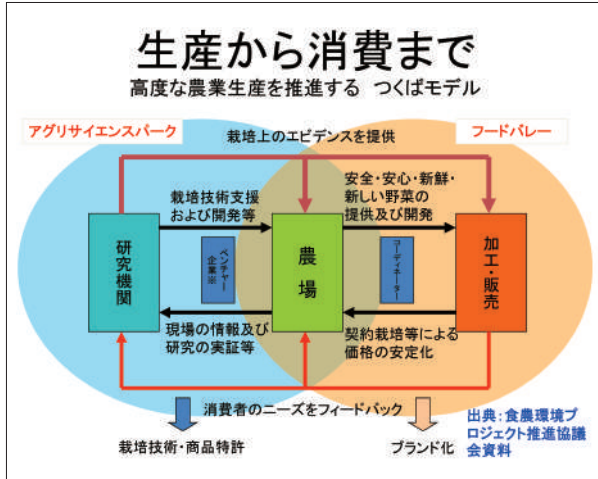
農業・地域産業に貢献、農産物を介して
藻類バイオマスをより身近に

つくば発 脱石油農業

施設園芸との連携イメージ脱石油システム
 生物生産の場としての植物工場

高純度バイオマス 養液活性化 サポートツールとしての植物工場技術

中野 明正「グリーン・イノベーションを考える」





柚山 義人「夢を磨け！地域を潤せ！」



つくばグリーン・イノベーション ～地域力の活かし方～

- 2030年の目指すべき社会像
- 夢と戦略
- つくばグリーン・イノベーション
つくば3Eフォーラム事務局のイメージ
有機施設園芸の構想(中野)

○人、技術、制度、情報、資金をつなげ具現化する方策は？
○つくばの地域資源(人材を含む)活かし方？
○スタートの切り方？

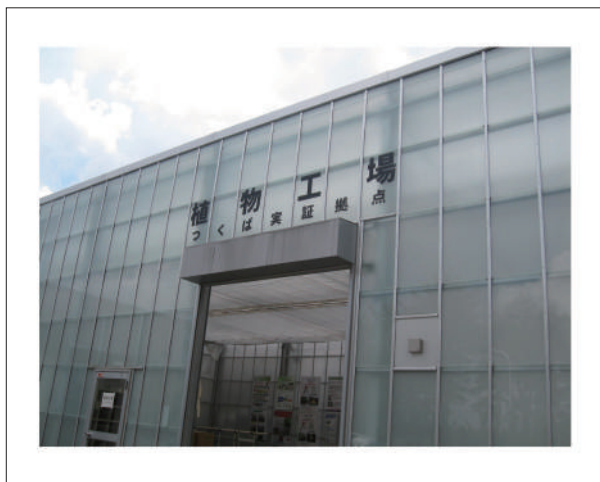
NPK48より <http://www.kf31.com/fomoshiro100/member/p015.html>



柚山 義人「夢を磨け！地域を潤せ！」

農業の6次産業化の考察
 ～農業生産法人筑波農場の取組を第三者的にみて～

| | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 筑波山麓で特別栽培法にて茨城コシヒカリ「常陸小田米」の生産 れんげ米、アイガモ農法米 農業機械のフル活用 無人ロボット田植実証 放射性物質検査 野菜栽培 造園業 農家直送蔵出し販売(ネット販売も)、緑むすび | <ul style="list-style-type: none"> 米粉利用(カステラ、シフォンケーキ、柏餅、プリンなど) 野菜ソムリエ |
| <ul style="list-style-type: none"> つくばいなか体験(田植えなど) Food Action Nippon さんずくん(移動野菜マーケット) マルシェ・ジャパンつくば | <ul style="list-style-type: none"> つくばFC つくば市美しいまち・みちづくり つくば青年会議所 つくば市商工会 PTA ツール・ド・つくば 棚田再生・宝鑑山(小田山) |
| <ul style="list-style-type: none"> ブログ、FB、Twitterの活用 ボランティア活動 | |



Project③: 藻類バイオマスエネルギーの実用化

概要

◆石油代替燃料として期待される藻類バイオマスの実用化に向けて、耕作放棄地を活用して、H27年度までに屋外大量培養技術の確立を回り、世界的エネルギー問題の解決に資するとともに、藻類産業の創出を図る。

【経済効果等】

- 約14,000トンの炭化水素オイルを生産
- CO2削減効果 約2万トン/年
- オイル関連商品売り上げ 約35億円 【目標年度: H32年】

取組内容

- 藻類の屋外大量培養技術の確立に向けた実証実験の推進 H24年度
- 屋外実証プラントの設置 H24年度中
- 藻類産生オイルを活用した高効率の運用(益々70台) H25～H27年度
- 実証プラントによる藻類産生オイルの生産 H27年度:14t、H28年度:14万t

【主な事業実施機関】筑波大学、関係企業、つくば市、茨城県

藻類の屋内培養(研究室) → 藻類の屋外培養(プール)

石油代替燃料 → 自動車用燃料 → 船舶用燃料

藻類の屋外培養(プール) → 新産業の創出 → 化粧品、健康食品

藻類を生産する藻類ポトリオコックス(左)とオーランテオキトリウム(右)



ラジオ番組

そーなんだ！ラヂオ ～おしえて！藻つくん～

放送日時: 毎週月曜日 19:15～19:30 (2013年7月1日～9月30日)

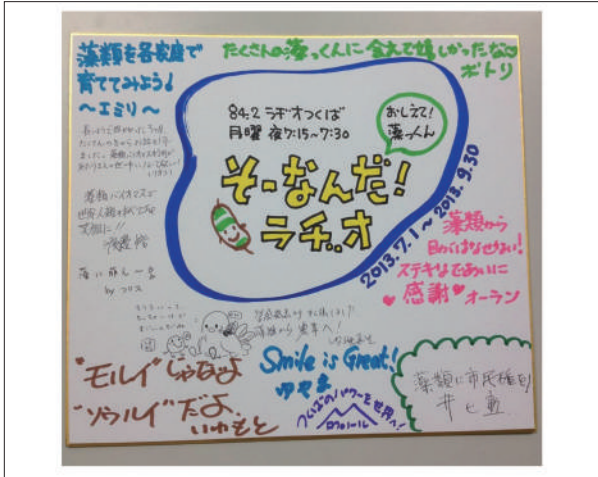
放送局: ラヂオつくば 84.2MHz, インターネット配信放送(サイマル放送)

http://eeeforum.sec.tsukuba.ac.jp/taskforce/bio_radio.php

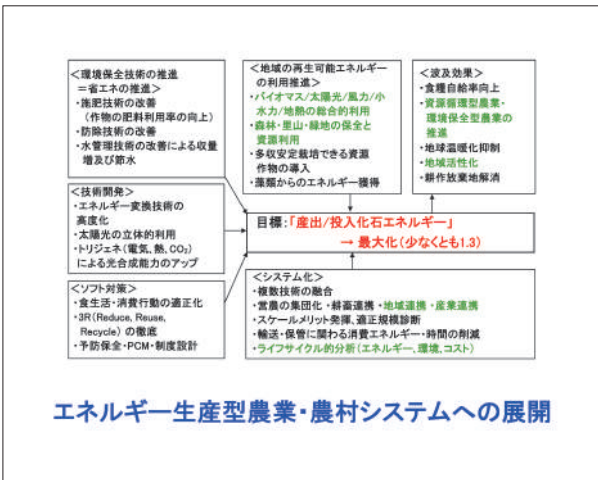
FB:「そーなんだ ラヂオ」

https://www.facebook.com/?ref=tn_tnmn#!/souRadio

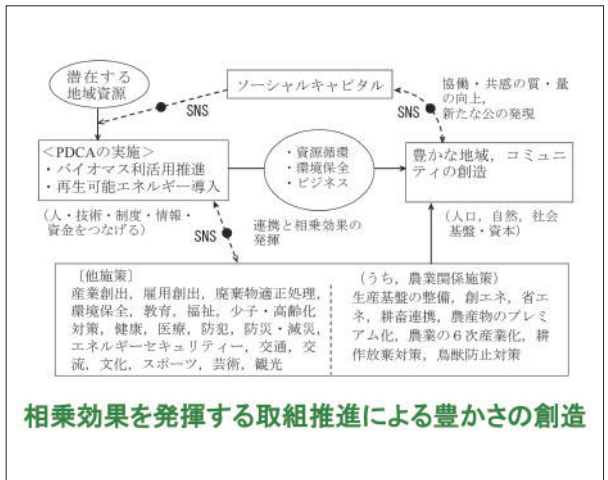
柚山 義人「夢を磨け！地域を潤せ！」



つくばサイエンスラボ2013にて



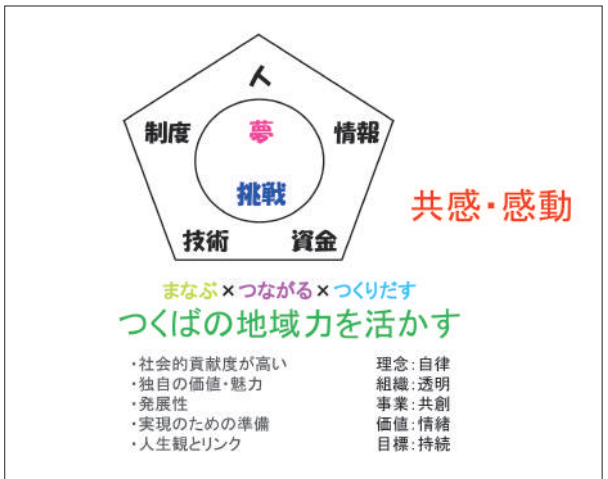
エネルギー生産型農業・農村システムへの展開



相乗効果を発揮する取組推進による豊かさの創造



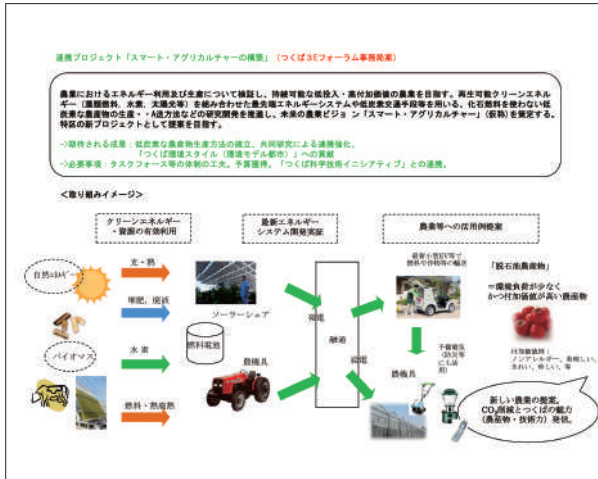
菅沼奏香さん作



まなぶ×つながる×つくりだす
つくばの地域力を活かす

- ・社会的貢献度が高い
 - ・独自の価値・魅力
 - ・発展性
 - ・実現のための準備
 - ・人生観とリンク
- 理念: 自律
組織: 透明
事業: 共創
価値: 情緒
目標: 持続

柚山 義人「夢を磨け！地域を潤せ！」



○モデレータープロフィール



柚山 義人 (ゆやま よしと)
つくば 3E フォーラム委員会・バイオマススタスクフォース座長
(独)農業・食品産業技術総合研究機構
農村工学研究所 資源循環工学研究領域・上席研究員

○略歴

1984年京都大学大学院農学研究科修士課程(農業工学専攻)修了、農林水産省入省。農業土木試験場、農業工学研究所を経て、1999年タイ国水管理システム近代化計画(JICA水管理専門家)。2002年(独)農業工学研究所、(独)農研機構・農村工学研究所農村総合研究部を経て、2011年から現職。これまでに、広域の水質環境解析及び水質改善、農業集落排水の高度処理、広域の排水診断技術、広域水管理、バイオマス活用システムなどに関する研究を担当。

○現在の主な取り組み、力を入れている事項

わが国には、美しい自然、水と土、伝統・文化、科学技術があります。人と技術と制度と情報と資金をつなげて、持続的で健全なビジネスとして成立するバイオマスなどの資源循環システムの構築を目指しています。ともに、宝ものの地域資源を発掘し、磨き、未来を拓きます。様々な活動や技術のコラボで新たな人の交流を生み出し、ソーシャルキャピタルを高めます。子供たちの笑顔、歓声、夢を大切にします。未来社会は、技術革新により機能・効率を徹底的に追及した部分と、心の豊かさを重視した部分が共存します。このため、先端技術の開発・実証、裾野を広げる身近な取り組みの両方に着目します。スマートビレッジ構築、ソーラーシェアリング推進、農業におけるエネルギー消費と再生可能資源による代替え、藻類バイオマス利用の社会受容性向上、ソーシャルシフトにのった研究成果の社会技術化に力を入れています。これまで貯えてきた体力、気力、経験、キャリア、能力、センスなど自分が磨いてきたものが土台です。

○趣味

多彩な地域活動、ゴーゴーバイオマス(歌)の普及、自然とのふれあい、ケア・ウォーキング、夢みる力の鍛錬、環境家計簿、ドヤ顔・ドヤ声での本気発信

○パネリストプロフィール



遠藤 健二 (えんどう けんじ)
 有限会社 ストロベリーフィールズ代表
 公益社団法人日本農業法人協会若手会代表
 夢の火種プロジェクト「世界農業ド
 リームプラン プレゼンテーション」
 統括責任者

○略歴

1966年 宮城県生まれ。1990年 東北大学農学部卒業後、農業コンサルタント会社等で働く。1999年 茨城県下妻市にて(有)ストロベリーフィールズを設立。商品開発やマーケティングを研究し、三越日本橋本店、新宿高野、千疋屋、伊勢丹等に販売、また楽天市場でも高い人気を博し、毎年イチゴ部門のランキングで第1位を獲得している。各種研修会において「農業者の志・夢」や「マーケット」「ブランディング」に関する講師も努め、好評を博している。

○現在の主な取組み、力を入れている事項

非農家の出身で、就農から約10年目にして百貨店や専門店が高い評価を受ける。商品パッケージや価値の伝え方に工夫を凝らし、一粒500円のイチゴ、朝摘みイチゴBOXなど様々な販売方法で消費者を引きつける。その経営センスが注目を集めている。新規就農者支援にも力を入れ、研修生を受け入れ、多くのイチゴの作り手を輩出している。これまでに、タイ、シンガポール、マレーシア、ベトナム、中国において、農業指導に携わり、世界視点で日本農業の可能性を発信し、日本農業が世界で貢献できる可能性を探っている。

○パネリストプロフィール



小久保貴史 (こくぼ たかし)
 農業生産法人(株)筑波農場 代表取
 締役、つくば市議会議員、つくば市筑
 波土地改良区理事など

○略歴

昭和48年つくば市小田の農家に生まれる(現在40歳)。平成4年八ヶ岳中央農業実践大学卒業後、平成10年(有)小久保造園土木代表取締役に就任、平成18年(株)筑波農場代表取締役に就任、平成21年社団法人つくば青年会議所 第27代理事長(まつりつくば・ねぶたパレード第6代実行委員長、つくば光の森初代実行委員長、ツール・ド・つくば初代会長を歴任)、平成24年つくば市議会議員に当選。5ツ星お米マイスター取得、お米アドバイザー取得

○現在の主な取組み、力を入れている事項

農場主として農業経営に営み、農業体験事業や耕作放棄地の利活用に取り組む。農研機構とも連携しロボット農業機械研究にも連携協力、6次産業化に向け農家レストラン「縁むすび」筑波山に今夏に開業予定。

○趣味

ドライブ、ブログ、SNS

○パネリストプロフィール



中野 明正 (なかの あきまさ)
(独) 農業・食品産業技術総合研究機構
施設野菜生産プロジェクトリーダー

○略歴

九州大学卒、京都大学大学院修士課程修了、農学博士(名古屋大学)、1995年農林水産省農業環境技術研究所採用後、農研機構 野菜茶業研究所において、一貫して、野菜の生産および品質向上技術に関する研究に携わる。この間、農林水産省 農林水産技術会議事務局 研究調査官(園芸担当、野菜、果樹、花き、茶業)、研究開発課 課長補佐(食料・農村班長)、農研機構 本部 総合企画調整部 研究調査チーム長、農研機構 本部 総合企画調整部 企画調整室長などを歴任。技術士(農業)、シニア野菜ソムリエ、JICA 専門家としてフィリピンや中国、エジプトなどで技術指導、山口大学、千葉大学、早稲田大学等で非常勤講師を務めた。著書には『トマト・オランダマト 100トン採りのひみつ』、『コンピュータによる温室環境の制御』、『根の事典』、『根のデザイン』、『栽培学』、『食品表示を裏づける分析技術』、『インテグレート有機農業論』等がある。

○現在の主な取り組み、力を入れている事項

植物工場をはじめとする、野菜の高効率生産に関する研究を推進している。いわゆるハウス栽培は、野菜の周年供給を通じて日本の食卓に彩りを添え、また、国民の健康に資する生産体系である。そして、このような集約的生産方式は、今後展開すべき力強い日本の農業を牽引するひとつの柱として注目されている。一方で現状は、化石資源に強く依存した生産体系であることも紛れもない事実であり、今後、さらに再生可能エネルギーの利用を加速化し、脱石油の生産体系を構築する必要がある。全く化石資源・燃料を使わない高効率な野菜生産体系。例えば、すべて藻類由来の再生可能な資源でトマトは作れないだろうか?そんなことを考え、夢見ている。

○話題提供プロフィール

田中 芳子 (たなか よしこ)
アップルパイ職人

○略歴

1948年東京生まれ、茨城県結城市在住歴40年の現在65歳。2011年秋、茨城県大子町のリンゴ農家の友人から、もぎたてのリンゴをもらい、そこから、その時期に一番おいしいリンゴを使ったアップルパイを作りはじめた。天然の素材オーガニック・メープルでリンゴを煮て、添加物なしで作り続け、改良のため試食してもらった数量は2,000個を超えている。多数の方々の要望で、販売を検討、保健所等の申請を終え、2012年10月販売の小さな小屋も完成し、現在に至っている。

○現在の主な取り組み、力を入れている事項

茨城県各地のイベントに出店し「よしこたんのアップルパイ」を販売してきた。その間も、SNS等で情報発信をし続けている。60歳定年を過ぎてから自分も夢を叶えたいという方々を、小さな作業小屋スペースから始められる「プチ起業」開業までのノウハウをも視野に入れて支援できる体制を整えていきたいと思っている。障がい者雇用推進も行いたく、現時点でもいくつか事業所から導入のオファーを受けており、それに向けて、作業工程の分業化を検討している。障がい者施設へのボランティア歴は15年以上。「よしこたんのアップルパイ」ブランドで障がい者が自分の得意な仕事で輝ける社会を目指し、障がい者雇用支援をしているパン工房等とタイアップして、事業の可能性を確認していきたいと思っている。

○趣味

- ・読書
- ・庭いじり(自宅庭をイングリッシュガーデンにして手入れを続けている。)
- ・生きものと触れ合う事(犬、猫、その他なんでも)